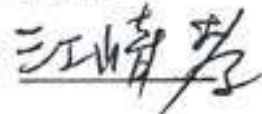


## 陳 述 書

平成24年1月23日

江崎 幸



- 1 私は1941年生まれ、慶応大学経済学部を卒業後、東京にて貿易会社に勤務するなどした後、帰郷し、平成15年から、政治・歴史ブログ『狼麿人日記』を開設しました。同ブログは幸いにも多くの読者の支持を得ています。
- 2 平成19年(2007年)3月、文科省が高校の歴史教科書の検定意見で、沖縄慶良間諸島でおきた集団自決に関し「軍の命令によるもの」という従来の記述を削除するよう求めたため、地元2紙が連日、「集団自決」に関する特集を組み検定意見を撤回することを求めるキャンペーンを大々的に張り、各市民団体が抗議集会を開くなど騒然とした状況でした。当時、私は沖縄タイムスよりまだまだという理由で琉球新報を購読していました。
- 3 そんな中、私はドキュメンタリー作家の上原正徳さんが琉球新報の夕刊に連載していた沖縄戦記「パンドラの箱を開ける時」を深く興味を持って愛読しておりました。といいますのは実証的戦記を得意とする上原さんが当時話題沸騰していた集団自決の「軍命論争」に関し、どのように記述するかが関心の的だったからです。当時、上原さんとは面識はなく、顔も知りませんでした。従来の沖縄戦の研究者のように、戦争の持つ影の部分のみを捉えて無理やりイデオロギー問題にすり替える手法をとらず、沖縄戦の真実の物語を追及している異色の沖縄戦研究者でした。上原さんが始めた1フィート運動を取り上げた沖縄テレビ制作『むかし むかし この島で』は、第14回FNSドキュメンタリー大賞ノミネート作品となり、沖縄テレビのサイトでは、上原さんの沖縄戦の記録発掘に対する姿勢がどのようなものかを垣間見ることができます。 [http://www.fujitv.co.jp/b\\_hp/fnsaward/14th/05-330.html](http://www.fujitv.co.jp/b_hp/fnsaward/14th/05-330.html)
- 4 私と同じように上原さんの『パンドラの箱を開ける時』の連載に注目している人物がいました。面識はありませんでしたが、当時産経新聞那覇支局長をしていた小山さんです。当時、私は小山さんのブログを愛読していました。6月16日のブログに第2

話「慶良間で何がおきたか」が20日の夕刊から始まり、慶良間の集団自決がテーマになることが書かれていました。上原さんは、「圧力に屈することなく執筆する」と話していたとありました。いよいよ集団自決の軍命論争の核心が語られる、と待ち遠しい思いでした。

- 5 待ちに待った20日の夕刊を手にとった私は、紙面を隅から隅まで探しましたが、「パンドラの箱を開ける時」は、何処にもありませんでした。通常、何らかの理由で連載記事が予定日に掲載されない場合、執筆者か掲載紙の方から、休載の理由について断りがあるものです。ところが、この予期せぬ休載については、上原さんはおろか琉球新報側からも一切何の説明もありませんでした。突然の休載に愛読者として一抹の不安が胸をよぎりました。言論封殺ではないかという不安です。
- 6 当時、漫画家の小林よしのり氏がその著書で沖縄の新聞のことを「異論を許さぬ全体主義」だと皮肉っていたことが現実のものとなって目の前に現れたと思いました。琉球新報に電話を入れてどういふことなのか問い質しましたが、最初に対応した琉球新報の記者さんは、連載記事は掲載されていると思っていたようで、私から「自分の新聞のことも見ていないのか」といわれて連載が掲載されていないことを確認した後、電話は編集部に戻されましたが、その時「上原さん、原稿が間に合わなかったのかな」という記者の独り言が聞こえましたので、記者にも知らされずに急遽「言論封殺」が行われたものと直感しました。電話に出た編集部の記者も動揺を隠せない様子で「調整中です」を連発するばかりで、読者の納得できる応答は出来ませんでした。そのときのやりとりを、当時から書いていたブログ「狼魔人日記」に「沖縄のマスコミは体制翼賛会か」というタイトルで書きました。
- 7 翌日のブログには「琉球新報は報道機関としてのプライドをかなぐり捨て、連載中の記事を『削除』するという禁じ手を使ったことになる。自分の意見と異なるという非常に分かりやすい理由で」と書き、「沖縄の言論空間は、いよいよ異様な様相を呈してきたようだ。サヨクの方々が常用する『戦前のような言論弾圧』がメディア主導で今正に沖縄で行われている。」と続けました。この琉球新報による唐突ともいえる「休載」に対し、私のブログ「狼魔人日記」の読者の反響も大きなものでした。「琉球新報に抗議します」というタイトルで「琉球新報の言論封殺が今日で4日目です」「・・・今日で7日目です」と定期的にエントリーして抗議の意を表しました。
- 8 それから四カ月が経過した10月16日に「パンドラの箱を開ける時」は再開されました。10月19日付のブログで書いたことを引用します。

《10月16日。二回目の「教科書検定意見撤回要請団」が上京し、沖縄中を巻き込んだ「集団自決—教科書」に関する大フィーバーも一段落が着いた。地元2紙の紙面にも一時のような「新証言者登場」といった刺激的な記事も殆ど見なくなった。その静寂の合間をつくように、その日(16日)の琉球新報夕刊に、4カ月の長期にわたって中止されていた「沖縄戦の記録」がソッと再開された。まるで一目をはばかるように。何の予告もなく。(略)ただし新報側の突然の連載中止であるにも関わらず、新聞社側からは連載中止の知らせも、4カ月後の突然の再会の知らせも読者に対しては一言の説明もなかった。

今後、琉球新報は「説明責任」で他人を責めることは出来ない。

結局、4カ月前に電話で問い合わせた答えの通りの長い「調整中」を、筆者の上原さんの「長い夏休み」としてゴリ押ししたのだろう。げに恐ろしきは新聞社の「調整」。これを別の名で言うと「言論封殺」と呼ぶ。長い「調整」の結果、内容も「調整」されている模様。事前の予告では次は「慶良間で何が起こったか」を明らかにするとしており、集団自決の真実を白日の下にさらすとのことだったが、再開した第2話のタイトルは「軍政府チームは何をしたか」となっている。「集団自決」が起きた1945年3月下旬の慶良間を飛び越えて、4月以降の沖縄本島の米軍上陸、投降住民の管理の模様を記しており、「慶良間で何が起こったか」については触れていない。》

- 9 上原さんの「長い夏休み」が終わり休載中の記事が再会されたとき、私は琉球新報の言論封殺を直感的に感じながらも、執筆者の上原さんに対して一種の失望感を感じたことを記憶しています。ひと言で言えば「上原正徳よ、お前もか!」という心境でした。

その年2007年から2008年にかけて新聞に登場する識者とと言われる人達の「集団自決」についての論評は横並びで例外なく「軍命論」の大合唱でした。当時の沖縄のマスコミの異様な有り様を同時進行で書き続けていたブログが雑誌社の目に留まり「沖縄紙の言論封殺」について原稿を依頼され、雑誌『Will』(2008年増刊号)に「これが沖縄の言論封殺だ」というタイトルで掲載されました。

すくなくとも私の知る限り、「軍命」を否定する識者の論文は見たことがありませんでした。そんな風潮の中で「右も左も関係ない、反戦平和も関係ない」と「豪語」していた上原さんまでもが、琉球新報の言論封殺に唯々諾々と従ったと考えたからです。

一読者であり上原さんとは面識のなかった私は、後に知ることになる上原さんと琉球新報との掲載拒否についての壮絶なバトルを知るよしもありませんでした。

従って肝心な部分で何の断りもなく四ヶ月も休載しておきながら白々しく「長期休暇」としか言い訳の出来ない上原さんに、やはり「全体主義の島」では実証的戦記を得意とする上原さんでも新聞の論調には迎合するものだと考えました。

それでも、肝心の「慶良間で何が起きたか」を欠落したままでは画竜点睛を欠くと考えた私は、最終回までには慶良間の記述に戻るだろうと失望しながらも淡い期待を抱きつつ、2008年8月の最終回を迎えることになりました。

「第13話 最終章そして人生は続く」と題する最終回は、「慶良間で起きたか」についての記述をフラッシュバックするどころか、本題とは外れる上原さんが始めた1フィート運動の経緯について紙面の大半を使っておりました。これでは「バンドラの箱を開ける時」というタイトルからしたら、まさに竜頭蛇尾の最終回でした。

「慶良間で何が起きたか」の記述を欠落したまま終わるのでは、結局琉球新報と上原正稔さんは期待して最後まで読み続けた読者を裏切ったこととなります。

その後、上原さんとは知遇を得ることになり、上原さんが琉球新報の言論封殺に対し提訴することを知って、当時の一読者としての偽らざる心境を陳述する次第であります。

以上